３つの定例活動

みなさまの参加を
お待ちしております

小原本陣の森

第１日曜日

知足の森

第１日曜日

相模湖・嵐山の森

第３日曜日

News Letter

NPO法人緑のダム北相模
midorinodam.jp

No.452-453

雨にも負けず、相模湖・嵐山の森定例活動

【定例活動報告】相模湖・嵐山の森

今日は台風18号が早朝九州に上陸した影響で、相模原も昼過ぎには大雨になるとの天気予報通り朝から雨。まだ小降りなので嵐山に行くことにした。

川田浩理事長が急死されたこともあって、朝礼の代役を担った。全員に葬儀が無事滞りなく終わったことを伝え、弟の川田晃氏より皆様に御礼の言葉が伝えられた。一分間の「黙祷」の後、各班の活動予定を連絡した。今後の不安を避けるため理事長代行を川田晃さんにやって頂くことを伝えた。

基地の周りの栗の木から栗が沢山落ちて散乱していて、イノシシなどが荒らしに来るため、地主の鈴木さんより「できるだけ拾って欲しい」の依頼があったので、手の空いた人は栗拾いを手伝うことにした。午前中沢山収穫出来たので、大粒の栗は鈴木さんに届け、その他は皆さんで持ち帰ることにした。みんな大喜びだった。

緑のダム北相模は相模原市内で活動する森林ボランティアです。急がず、無理せず、楽しく、休まず、 ボチボチと・・。

午後から雨がひどくなってきたので、本部「かどや」の二階で昼食の後、座学（講師：二藤君）により森林整備について話があり、中学生たちは真剣に勉強されていた。先日、イーパーツサポートセンターから寄贈されたパソコンを披露し、ＮＰＯの経理や連絡のために使われる目的を伝え写真に収め、その時の状況を画像と共にイーパーツに「喜びの声」として送らせて頂いた。（報告：小林照夫）

9月の活動は雨のため、駅前「かどや（食堂2階）」での屋内学習となった。当会は、前理事長の石村黄仁さんのモットー「雨でも休まず」を20年ずっと続けている。今年理事長に就任した川田浩さんの9月7日の突然の死に直面し、まだその現実を受け止められない気持ちで、嵐山の基地に一端集合し、川田浩さんに全員で黙祷を捧げご冥福をお祈りした。そして朝礼で、宮村連理副理事長、小林照夫理事、川田晃理事、丸茂で川田さんの大役を引き継ぐ事を報告した。

その後、宮村先生は東京学芸大学附属小金井中学の生徒さんと一緒に、植生調査のため森に入り、他の参加者は「かどや」行き、昼食時には全員集合した。宮村先生の何人かの生徒さんが、現場で学んできた逞しく成長した二藤政毅さん「フォレストクラス（麻布大ＯＢ）」に森の現場での活動について質問し、それに熱心に答える姿がとても強く心に焼き付いた。宮村先生の何人かの生徒さんが「フォレストクラス（麻布大のOB）」の二藤さんに森の現場での活動の事を真剣に質問している姿、その質問に現場で学んできた逞しく成長した二藤さんが熱心に答えている姿、20年続けてきた石村さん、宮村先生他若者を指導してきた桜井尚武先生、川田浩さんをサポートしてきた小林さん、若者を見守ってきた年輩の方たちが、微笑んで見ている。これこそ世代を超えて、森で結ばれている証であり、それは教室がなくても校舎がなくても「どこでも学校」ではないか。お互いが世代を超えて20年間続けてきた自信と誇りのNPO緑のダム北相模ならではの光景に触れ、思わず胸が熱くなった。石村さんのやって来た事、川田さんがやりたかった事、やり残した事はしっかり次の世代に受け継がれていくことを確信したのである。

雨でしかできない講義形式の活動

フォレストクラス、林業のプロ、二藤さんから指導

補足しておくと、「フォレストクラス（麻布大のOB）」の滝澤康至さんを世話役として、二藤さん、斎藤駿一さん、斉藤理沙さん（旧姓神宮さん）、加藤浩晃さん等は社会人となった今でも緑のダム北相模のOBとして活動に参加し、後進の面倒をずっと見ている。NPOの高齢化がどこでも問題になっている今日、緑のダム北相模は中学生、大学生、そして高齢者まであらゆる世代がつながり、世代交代が行われている数少ないNPOでありとても恵まれていると思った。（報告：丸茂　喬）

この日は予報通りの雨。理事長だっただけでなく、我々が活動していく精神的支柱でもあった川田浩さんがお亡くなりになって初めての森。森もそのことを悲しんで泣いているんじゃないだろうかという雨のなかで、少しセンチメンタルな気分になりつつ活動に臨む。作業自体がまだまだ怪しい地球環境部にいつも厳しく、しかし的確に、そしても最も応援してくれてきた川田さんが抜けた穴はあまりに大きく、まだまだ教えていただきたいことばかりだったが、それでも我々は活動していかねばならない。安全に、ときに大胆に、地球環境部らしく活動し、ご恩に報いたい、そんな話を中高生としてから活動を始めた。

雨であることは分かっていたので、中高生も準備は万端。桜井先生もいらっしゃるとお聞きしていたので、雨の中お願いをして植生調査の準備。これまで学芸大の小柳先生にいろいろ指導されてきた生徒たちにとって違う視点での植物の話。いつもある一定方向の知識を鵜呑みにする学校の中で複数の専門家から違う視点での話を聞き、自分たちのやり方、答えを見つけていかねばならないということに戸惑いながらも、いずれ大きな感動になるに違いないと期待しながらの活動でした。活動に参加した生徒の感想を紹介します。（報告：宮村　連理）

僕の活動は森の光量を測り、それによってどのように森に光があたり、影響があるかという活動です。なので、晴れないと出来ません。本日の天気は台風近づいていたこともあり大雨でした。しかし、とても有意義な活動が出来たと思います。何故か、それは、分からないことが分かったからです。今までの僕達の活動を見てみると、これがこうなるから…という風に論理を立てすぎていました。しかし雨でもいざ行ってみると、自分たちが予定していたことが間違っていたところが多く、驚いてしまいました。今回は雨が降ってしまいましたが、今までしてきたことを見直す、いいきっかけとなりました。そのため冒頭にも書きましたが、とても有意義なものとなりました。実際に見る大切さというこの活動のテーマを、身をもって体験した一回になりました。（福田将希、東京学芸大学附属小金井中学校２年）

今回の活動は我々小金井中の生徒にはとても厳しいものになったと思う。活動当日まさかの台風直撃、活動に参加した生徒も10人いるかいないかという状況のなかで相模原へと出向いた。しかし今回、我々にはとても力強い味方がいた。林業を営む二藤さんである。森の中は予想通り雨でぐちょぐちょだった。前回この活動に参加したときは快晴で、服装も長袖長ズボンという軽装でよかったのだが今回ばかりはそうはいかない。

森の中ではまず、森の中に光を届けるために、それを妨げる植物をそれぞれ分かれて切っていった。次に雷に打たれたと分かる比較的低い木を仁藤さんに指導されながら切り倒した。前回の活動では木も高く、危険も大きかったため大学生や大人がつきっきりで作業したが、今回は倒す木も低かったため、我々生徒が木を切り倒すまでの過程のほとんどを担当した。受け口の向き、追い口の深さなどを考えながら合計2本の木を切り倒した。森での活動の後は、林業のプロである二藤さんにいくつかの質問をさせていただいた。どの質問からも二藤さんの森への思いや、プロ意識を感じ取ることができた。今回の活動を振り返ってみると、自ら考えて動いたことが多くあった。森に光を届けるためにはどの植物を切ればいいのか？受け口の向きは？追い口の深さは？どんな質問をしようか？など普段よりも活動しにくい中だからこそ、雨だったからこそ動きやすい日よりも、晴れの日よりもより多く、より深く考えて行動することができた。普段ならできないことをした。そんな活動だった。（乾有希、東京学芸大学附属小金井中学校２年）

【定例活動報告】知足の森

今月の活動は、知足の森のメイン区画からひとつ尾根を挟んだ小原側の境界線の調査。片側の境界線は尾根なので、前回までの調査でほぼ確定していて、反対側の境界線、残念ながらヒントなしでの調査となりました。いつも通り、ハンディGPSがみちびきの信号を捕らえているのを確認し、ポケットコンパスを使い作業を始めました。しかしハンディGPSがみちびきの信号を捕らえているとはいっても、報道されているようなセンチメートル単位での測量には専用の高価な受信機が必要で、我々が使っているハンディGPSではそこまでの感度はありません。しかし、常に天頂にいることで他の衛星の信号を調整し、実感としては数m単位まで精度を上げてくれているようです（ちなみにこの機種はロシアの衛星も捕らえていて、補正する効果はロシアの衛星の方が強いとする情報もあったりしますが、それではみちびきが不必要となってしまうのです、、、）。そんなことを頭に片隅に測量が始まりました。今回は測量開始地点に大きなコンクリの杭があり、そこからのスタート。ポケットコンパスに始めてさわる生徒、ポールまでの視界を確保するために草を刈っていく生徒、ポールを持つ生徒に大声でちょい右、行き過ぎなんて声をかけながらチームワークでの測量。この日は公図でひとつ分の区画の角を発見し終了した。学校に戻ってからGPSのデータを確認すると緯度経度にほとんど誤差がなかった。やはり最初の開始地点の精度が重要だったようです。その後、畑に寄らせてもらい収穫の手伝いをして今回は終了しました。

宮村　連理（本会、副理事長）

知足の森

境界線をポケットコンパス、GPSを使って調べました。

【若者の森づくり】ForestClass

今月の活動はメンバーの予定もあり休みにさせてもらいましたが、嵐山の活動に宮村さんの生徒さん達の講師として呼んで頂いたので参加してきました。当日は生憎のどしゃ降りの雨で中止かと思いましたが、通常通り活動されるとの事でさすが10代はパワーが違うなぁと笑。

内容としては間伐方法の指導と活動後の自分の林業という仕事についてのインタビューに答えるといったものでしたが、間伐は既に体験してる子たちばかりで気をつけるポイントを確認しながらみんな積極的に活動してくれ嬉しい限りでした。その後のインタビューでは、何で林業の仕事を選んだのか？仕事をする上で大事なことは？今の林業の問題点は？など、質問にいくつか答えさせてもらいましたが、普段なかなか人に話す機会もないので自分自身も考え方の確認もできましたし、伝え方という部分でも色々と勉強させてもらいました。聞いている子も一生懸命、メモを取っていて凄いなぁと関心するばかりで、次はもっと突っ込んで質問してくれたらより嬉しいなぁと…笑。今後も講師として呼んで頂けるということなので、未熟ながら精一杯頑張っていきたいと思います。

二藤　政毅（Forest Class）

【若者の森づくり】Forest Nova

今回は、私が夏に原田先生と一緒にマレーシアの現地人のコミュニティに参与観察をしに行った話をします。まず、ミリという都市から現地の人のコミュニティに向かいました。現地の人はプナンという民族で主に狩猟を生活の糧にしています。彼らはイノシシをメインに狩っており、森の中にいくつかの暗号を残して行動します（木の枝で現在地の方向を指す暗号など）。また、ラタンという植物を使いかごなどの工芸品を製作、販売してもいます。彼らの住む森はサムリンという伐採会社に違法伐採されており、コミュニティに向う途中もサムリンのトラックや労働者、伐採された木材などを多く見かけました。私たちも工芸品の腕輪を買いました。Forest Nova☆でもアクセサリーの製作を行っていますので大変参考になりました。プナン人は人と争うことは好まず、穏やかなコミュニティを形成、外部者に対しても比較的友好的です。食事に関しては狩猟や釣りが成功したら動物性のもの、そうでなければ野菜などを食べているようです。また、お菓子も好むようです。

もう一つ滞在した村では、バイクでの移動が基本で、山の高いところで焼き畑農業を行っていました。その焼き畑の種まきを手伝いました。棒で穴をあけ中にいくつかの稲のような植物の種を入れるのですが、斜面を歩きながら焼けた木をかわして植えるのは大変でした。また、そこの村でもラタンを使ったかごを作っているのですが、そこで通常市場で買えば100リンギット（2500円程度）のかごが15リンギット（２８０円程度）で買えました。かごの製作はForest Nova☆では難しいと思いますが、Forest Nova☆でもメインになるような物販商品を作りたいと思いました。これからも、商品開発を続けていきます。

蛭に噛まれて靴が血まみれになったり、ダニに刺されたりしましたが、楽しい旅でした。機会があればまた行きたいです。

望月　健一（Forest Nova）

【若者の森づくり】地球環境部

今回は９月２３日から２日にわたって行われた積み木イベント、「３００００このつみきとあそぼう」に企画してくれた大学院生、参加した中学生の感想をご紹介します。また活動に先立ち、上智大学アジア人材養成研究センターのニムソティーヴン先生からアンコールワットについての講義をお願いいたしました。

私はこのイベントの企画を行う上で大きく2つのことを念頭におきました。まずは間伐材の積み木にたくさん触れてもらいたいということ。もう一つは積み木を用いた造形活動をコミュニケーションツールとし、その場にいる人と楽しく発展的な活動をしてほしいということでした。駅前の市民ホールということで様々な年齢の方がご来場くださることを想定したときに、何か遊び方に関してのルールを強制したり、設計図通りに組み立てたりするようなことはあまり発展がないように感じました。30000個の間伐材積み木、それを目の前にしたときに興味の湧くポイントは人それぞれで違うのではないか、そう考えた私たち企画者は“遊

びかたについての指示などは一切しない”ということを一番のポイントにしました。

　実際当日の様子はというと、こどもたちが失敗を繰り返しながらも積むことに熱中したり、ぼーっと休んでいるようにみえても積み木に寝転んで木の香りを楽しんだり、木目を眺めたりして自由に木と戯れている様子でした。また、大人の方もこどもたちの作品を眺めたりしながら、積み木を介してコミュニケーションを行っていました。子供も大人も自らが、間伐材の積み木を様々な角度から五感を使って楽しく触れ合っていました。

二日間、“遊びかたについての指示などは一切しない”ということで企画を行ったことで、様々な活動を目の当たりにすることができて、間伐材の積み木の大きな可能性を感じることができました。今回主にこども向けのイベントとなりましたが、今回の経験を生かし、親子や大人の方を対象とした活動も企画してみたい所存です。

蠣崎　夏帆

（東京学芸大学大学院教育学研究科美術教育）

　休日で出かけて行く家族連れを横目に、平日と変わらない電車に揺られた。積み木のイベントのリーダーの私にとって、この二日間は今までの課題研究の中で一番大切な二日間だった。この日の為に、積み木で作るアンコールワットについて調べたり、学生と話し合ったりと準備をしてきた。準備の時点ですでに働くことが多く、開場前からクタクタに疲れていた。しかしいざ始まってしまうと、たくさんの親子が来てとても忙しく、疲れていることも忘れるくらいだった。実際に二日間で300人以上の親子が参加してくれた。何より嬉しかったのは、来てくれた子供が「帰りたくない！」とお母さんに言っていたことだ。アンコールワットを作る時は、課題研究のメンバーを捌いたりいつもの学校生活では私がやらないようなことができて、成長した気がした。本当に充実した二日間だった。リーダーとしてうまくいったかどうかはわからないが、イベントとしては大成功だったと思う。校外の活動だったからこそ、わたしたちの課題も新たに見つかった。しかし今回私は、それよりも仲間と協力して大きいことをし遂げるという大変さや重要さ、そしてなにより大きな達成感を感じた。二日間という短い間だったが、このイベントに関われて本当によかった。たぶん今後の人生で、あれほど多くの子供と一度に遊ぶ機会はないだろう。そしてこの二日間の思い出は強烈で忘れることはないだろう。あんなイベントにリーダーとして関われたこと、そしてなによりイベントを企画してくださった学生の皆さん、神村さん、そして宮村先生にもお礼申し上げます。

仲田未希（東京学芸大学附属小金井中学校２年）

　イベントでは、アンコールワットを積み木で作った。僕は、ほとんど積み木の運搬を行っていただけだがアンコールワットを作るのはとても大変だった。特に運搬作業を行っていた僕から見ると、同じ種類の積み木を集めるという作業が最も大変だった。積み木の種類は3種類しかないものの最も必要だった立方体の積み木は、台形の積み木と紛らわしくまた、序盤で大量に使用したため数が少なくなってしまったためだ。しかし積み木グループが中心となってアンコールワットを作成している中で運搬という作業は地味な作業だったが、作成に関わっているという実感を得ることができてよかった。また、この積み木は、木の間伐材で作られている。間伐材は他の木のために犠牲になった木なので、それを活用してイベントを行うということは、森の実態を知らない人にアピールすることができる貴重な場だったと思う。また、このよ

うなイベントによって環境を守ること様々な人にアピールしていけたら良いなと感じた。

川合啓生（東京学芸大学附属小金井中学校２年）

【イベント報告】

「さがみ湖コンシェルジュ」が本日嵐山でスタートした。当会会員の淵上さんが中心となって始めた「さがみ湖コンシェルジュ」、相模湖周辺に住む女性5名で立ち上げたイベントです。女性１２名に男性５名、今回のスペシャルセッションはパーカッショニストとして東京芸大大学院から永井さんの立木や自然の石などで様々なジャンルの演奏を相模湖畔で食事を取ながら聴くという趣向です。我々緑のダム班は、午前中嵐山内を案内引率するのが目的です。神奈川県インストラクター会からは菅原会長と境氏が森林の草花を丁寧に教えてくれました。草花に詳しい方は色々質問を交わしながら、楽しく散策をすることができた。アッという間にお昼時間になったので、もっと山の話が聞きたかったと残念がられる状態でした。

昼からは、相模湖畔の山口ボートさんの桟橋上に臨時のテーブルをこしらえ、地元の無農薬野菜や米麹と一緒に炊いたご飯で腹を満たしながら、永井氏のパーカッション演奏を堪能して団らんのうちにイベントも成功のうちに終了することができた。我々散策班としては、蜂被害や転倒による怪我などを心配したが何も無く無事に終了してよかった。基地の周りに栗が沢山落ちていたので、地主さんの許可を頂き栗拾いを始めたところ、皆さん必死で栗拾いをされてました。（さすがです）。緑のダムとして今回の収穫は、相模湖ダムの真ん中あたりで全員が輪を作り、一方に竹の節を残し反対側の節を切り落とした長さ、太さの異なる大小の真竹の筒を各自1～２本両手に持ち、リズムに合わせてダムのコンクリートに打ち付け音をだし音楽を作る作業をやったが、今後のイベントにも使えそうなので、今度緑のダムでやってみたいと思った。

小林　照夫（本会、理事）

NPO法人
緑のダム北相模

名称：特定非営利活動法人　緑のダム北相模
事務局：154-0023　東京都世田谷区若林３－３５－９
発行人：NPO緑のダム北相模　事務局 Tel&Fax　03－3411－1636

支援団体：セブン-イレブン記念財団、２２世紀やま・もり再生ネット
積水ハウスマッチングプログラム、国土緑化推進機構
賛助団体：北都留森林組合、（株）トレカーサ工事
東海大学付属望星高等学校、生命の森宣言・東京
協働団体：神奈川県、相模原市、麻布大学、マルモ出版、
東京学芸大学環境教育研究センター、
（社）さがみ湖 森・モノづくり研究所

参加にあたって：

初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合してください。服装、持ち物については、汚れても良い服装、着替え、滑らない靴　成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水、主食、第３日曜は自分の食器(お椀・お箸)

危機管理・救急対応：

危険管理・救急体制・森林ボランテイア保険の準備の他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。